

「われを去らず」

神田ひろみ

ひやひやと陸奥に入るふくらはぎ

白河の関絢爛と稲つるび

義経記の地を這ふごとく秋の雷

色彩を遣ひ果して葉鶏頭

秋泉のひとり激してひとり止む

月明の子規の机はΣシクマかな

厄日過ぐ身を締むるものみな外し

声出さば吾も観世音紅葉中

冬蕨掌に金色の古生代

濃く淡くBの鉛筆寒雀

遠ざかるとき桃源となる梅林

縞馬の縞がくらくら涅槃西風

われを去らず三月十一日の水

春しぐれ恵心僧都に泣き黒子

いづこかへ去る身なれども暖し

沈丁花夢に白ひのありとせば

平家琵琶耳は臙をぬけられず

処暑過ぎぬ街三角の景に満ち

おくのほそ道 五句

大蓼の花や那須野に馬を見ず

かさねといふ少女帚木紅葉かな